

中興期上方の奉納四季発句秀吟集

明和から寛政にかけて蕪村・嘯山ら京の宗匠が月並発句合を催して
いたことは以前に述べたが、それと並行してこの時期に上方一円で盛
んに行なわれたものに不定期の発句合がある。この不定期の発句合は、
その殆んどが諸社寺への奉納を名目として四季自由題による発句を募
り、少ない時でも千多い時には六万以上を集め、秀吟を通常の俳書と
変わらぬ装丁の半紙本にて披露するのを例としている。その秀吟披露
の冊子は、性格から奉納四季発句秀吟集と呼ぶのが適当と思われる。
以下にこれを便宜上秀吟集と略称する。これまでかような秀吟集及び
その背後にある奉納を名目とする不定期の発句合については、同時期
の月並発句合と同じようにさほど注意が払われることはなかった。そ
こでこの稿では中興俳壇の底辺の動きを整理する意味で、管見に入
った上方の秀吟集のあらましを紹介し、それを通して不定期の奉納発句
合の興行形態がどのようなものであったか、またその発句合が如何な
る流れの中に生まれそして衰微して行ったかを考えてみたい。

管見に入った秀吟集を次に一覧表にしてみる(表I)。「」で表わ
すのは逸題本である。また、『時代まきゑ』(架蔵)、『亀の鑑』(関西大
学図書館蔵)、『奉納幾太佐可邦』(大阪女子大学山崎文庫蔵)、『万句抜
萃花角抵』(同上)、『俳諧花の杖』(京大大学図書館蔵)以外は全て天

理図書館綿屋文庫蔵本である。

表 I

選者	名	書
布門	〔松葉齋〕	寛保1
布門	式万梅	延享1
布門	〔みつ巴〕	2
布門	桑老撰	宝暦2
茶雷	六々集	3
社笛	俳諧志都織	宝暦期
社笛	滝清水	安永
女媒	四季芦辺鎌	2
女媒	佐太のわたり	3
女媒	〔福海集〕	5
女媒	時代まきゑ	6
女媒	〔辛崎奉納集〕	7
馬城	三万椿	8
馬城	俳諧幽閑集	9
茶裡	俳諧うらはの花	天明1
蕪村他	俳諧うらはの錦	4
女媒	俳諧閑のとびら	4
女媒	亀の鑑	4

* 永井一彰

6	俳諧雪月花 おのころじま集 二万句蘆の錦 をの、ちぐさ 納幾太佐可那 貫珠編	寛政 1	8	寛政 1	3	5	6	9	12	寛政期 享和 1	2	3	4	5	6	13	文政 1			
関亭他	蛸天	嘯山他	嘯山	女媒	嘯山	化石	嘯山	嘯山他	關更	南歌他	嘯山	嘯山	甘泉	李流	升六他	斗雪	嘯山他	星池他	万和他	李流他

右の表から明らかなように、大阪では五流齋一世布門・三世女媒・四世化石・布門門下社笛らの五流齋一門、京都では滄浪居一世嘯山・二世李流・嘯山門下斗雪らの滄浪居一門の活躍が目立つ。それ以外のものも、概ね五流齋系・滄浪居系の二つに大別することができる。また、滄浪居一門に圧倒されて目立たないが、夜半亭一門にも蕪村に天明年『俳諧関のとびら』の選がある。よって、以下五流齋・滄浪居・夜半亭各派の秀吟集を中心に論を進めることにする。

一、五流齋一門

先ず五流齋一門の秀吟集を詳しく表にして示そう(表II)。
一 秀吟集のあらまし

この一門の秀吟集の典型は天明四年『亀の鑑』である。『亀の鑑』は原裝半紙本三冊。各冊左肩に無辺白地題簽があり、それぞれ「亀の鑑天」「かめのかみみ地」「かめのかみみ人」と墨摺り。丁付は各冊とも板芯下部にあり、天巻は▲序一〇▲序七終・▲一〇▲五十、地巻は▲一〇▲五十八、人巻は△一〇△六十四・△跋一・△跋二全・△の如くで、全百八十二丁の大冊。天巻見返しに「浪華天満宮／奉納四季発句集／寄句六万三千五百句」と奉納先・寄句などを掲げ、続いて天明甲辰きさらぎの日浪華葭城書の仮名序・天明甲辰春洛陽淡州書の漢文序がある。選句は天巻一丁表初行の句頭に「巻頭」として半丁十句宛に三丁表終行まで計五十句を並べる。以下同形式にて人巻五十丁裏までに計六十二巻各巻五十句を配列。人巻五十一〇六十四丁は地域別の入選作者句引。続いての二丁に天明甲辰春三月石路権書の漢文跋、終丁にはこの句合の発企里杖ら及び選者五流齋の追加吟を添え、後表紙見返しに板元を記す。以上が五流齋一門の秀吟集のうち最も整った体裁を持つ『亀の鑑』の概要である。これを基準に他の秀吟集を見てみよう。

先ず本の大きさであるが、『芦辺鎌』が小本である他はすべて半紙本。但し『桑老撰』には縦長の変形半紙本も存在する。冊数は寄句の極めて多い『三万椿』(二冊)、『亀の鑑』(三冊)、『貫珠編』(二冊)を除き、全て一冊である。丁付は、『桑老撰』、『佐太のわたり』以外は『亀の鑑』天巻に等しい。因みに『佐太のわたり』も序文はそれと同じ。『桑老撰』は『亀の鑑』人巻と同じ形式である。また、見返しに奉納先・寄句等の摺り込みがあるのは『松葉畚』、『桑老撰』、『滝清水』

表

II

書名	年記	発企	選者	奉納先	寄句数	選句数	版元・彫工
〔松葉齋〕	寛保元辛酉年八月刊	難波方繁・北箕ら	布門	住吉神社	一万二千余句	六百句	大坂心齋橋博労町南橋町書林 河内屋宇兵衛 同 安堂寺町二丁目 彫工 村上清蔵
式万梅	延享元子年八月布門序	北箕	布門	天満宮	式万三百廿八句	一千句 額上三百句	大坂安堂寺町二丁目 彫工 藤倉清蔵
〔みつば〕	延享二歳次乙丑仲夏序	摂愼持寺 吉田北枝	布門	摂愼持寺境内 八幡宮	三千余句	百五十句	大坂安堂寺町二丁目 彫工 藤倉清蔵
桑老撰	宝暦二壬申五月廿一日開卷	大坂一羯改 本田椿阿	布門	難波稻荷社	一万四千余吟	秀吟七百番 百四十吟絵馬	
六々集	宝暦三酉晚夏序	摂愼持寺 市月堂其然	布門	摂愼持寺大悲閣	一万七千余吟	八百五十句	
滝清水	(宝暦期)	浪花文房・何羨	社笛	清水寺	三千句	百十五句	
四季芦辺鎌 発句	安永二巳とし季夏序	羽州最上辺好士 (代理東島)	社笛	聖廟	三千余章	百八十五句	大坂順慶町二丁目 書林 河内屋清兵衛
佐太の わたり	安永三年仲夏序	河内佐太 伊奈鬼卵	女媒	河内佐太社	不明	六百五十句	大坂和泉町 書 近江屋平次良 藤谷汗青館
〔福海集〕	安永五丙申春三月序	淡嶋帯庵	女媒	観音薩埵	七千余句	三百五十句	大坂和泉町 書肆 近江屋平治郎
三万椿	安永戊戌(七)春正月序	大坂二鷗・魏雀	女媒	天満宮 御霊宮	三万八千二百五十句	千九百章	
亀の鑑	天明甲辰(四)春三月跋	茨木里杖	女媒	浪花天満宮 茨木大明神	六万三千五百句	三千百五十章	安堂寺町心齋橋筋 浪速書林 本屋武兵衛
貫珠編	寛政紀元己酉秋九月後序	淡路福良 楚調・麴常・南咳	女媒	伊勢神宮 墨江神社 福良八幡宮	五万五千句	二千七百五十章	華陽安堂寺町心齋橋筋 書肆 本屋武兵衛
松の尾集	寛政五癸丑如月序	和州立田 老松	化石	酉松の尾大悲閣	六千余句	三百句	大坂心齋橋筋安堂寺町南江入 書肆 本屋武兵衛

表 III

書名	年記	発企	選者	奉納先	寄句数	選句数
俳諧志都織	宝曆乙亥(五)年秋序	淡州委文庄 弓羅・雲曉	茶雷	淡州委文八幡宮	五千句	二百五十句
時代まきえ	安永丙申(五)年秋序	願主 田中道雄 編輯者 武田吾立	馬城	有栖山清水寺	一万六千六百八十句	千六百五十句 <small>奉納松馬座百六十五句</small>
俳諧幽閑集	安永八年己亥正月副言	願主 川岡其水 編輯者 竹内有光	馬城	東讃白鳥神廟 本府 天満宮	二万六千六百余句	千三百三十句 願主 百六十六章
俳諧うらはの錦	安永九年孟春序	淡路凡曉ら五名	茶裡	天満宮	二万二千余句	千百句
俳諧雪月花	天明六丙午正月刊	集者 河州山之上 田中貞士	蘭亭 南之敵	河州山之上 産土神	七千五百句	千句
おのころじま集	天明丙午春序	願主 玉水・挂布 編輯者 淡小樓並 服部乙貫	蝸天	淡州 磯取蘆嶋大神宮	四千句	二百句
花葉節	寛政庚申(十二)晚秋序	河内都石ら五名	南敵ら 四名	諸某神廟	六千余句	四百八十句
なには風俗後篇	享和改元とり歳初夏序	甘泉及び 門生不存・鳥園	甘泉	有馬薬師廟	三千句	百五十句

『三万椿』『亀の鑑』の五点。選句を「巻頭」から順に半丁十句宛に五十句づつ並べる形式は『芦辺鎌』を除いて全てに共通する。序文は『桑老撰』『澆清水』の他は何れにも備える。但し、序文を持たない右の二点は先に触れた如く見返しに奉納先・寄句等の印刷があり、それが序文に代わって句合の成り立ちなどを説明する役目を果たしている。跋文は無いものが多い。撰者もしくは発企の追加吟は『松葉畚』以外は全てに添えられている。句引は寄句数の少ない『みつ巴』『澆清水』『芦辺鎌』の他は必ずこれを備える。板元あるいは彫工は記されないものもある。

以上要約すれば、五流斎一門の秀吟集は半紙本一冊を基本として丁付は板芯下部に▲の符号をもって表わし、序文を添え、選句を「巻頭」から高点順に半丁十句宛各巻五十句を並べたあと、選者あるいは発企の追加吟及び句引を添え、終に板元または彫工名を付すというの

がほぼ定まった板式であったことが知られる。因みに記せば、『佐太のわたり』『福海集』の二点は大坂近江屋平次郎から、また『亀の鑑』『貫珠編』『松の尾集』の三点はやはり大坂の本屋武兵衛から出版されている。また『式万梅』『みつ巴』には同一の彫工が携わり、『松葉畚』の彫工村上清藏も住所が同じであることから考えればあるいは同一人物ではなかったかと思われる。かように五流斎一門の秀吟集は二点を同一書肆から続いて出版することが多い。それに、逸題本もあるの断定はしかねるが、『佐太のわたり』『松の尾集』を除けば書名を悉く三字題としている。板式に定型があったことと併せ、多分に系統立った印象を受ける。

さて、このような五流斎一門の秀吟集とはほぼ同じ板式を持つものに表Ⅲの如きものがある。

宝暦五年『俳諧志都織』が比較的早い時期に属するが、それ以外は宝暦六年に布門が没した後女媒が活動を始めてからのものばかりである。それに選者はいづれも摂津・河内・大坂に属する。これらの秀吟集は布門選のそれに倣ったものと考えて良からう。

二 興行形態

では、これらの秀吟集としてまとめられた発句合は一体どのような興行形態を持っていたのであろうか。それについても最も詳しいのは『式万梅』の布門序文である。

門人北箕宿願有て天満宮へ俳諧のほつくしふをさゝげ奉らんと、四季の詞よせを作りこれに雁書を添て海陸の好士につくるに、翼北にさり南に来て既二万句を得たり。則巻を廿冊にわかち一箱として御神前に納奉り、亦一卷にて五十番の簡逸を予に属して撰ませ、都而千句を一帙として世に弘む。号て二万梅秀吟集といふ。これが中に二百番を抜出て額に露し、御広前かけ奉て参詣の人々の休息を慰む。是皆先集松葉畚の例によるものなり。

この選者自らが記すところの序文によれば、発句合の興行形態は凡そ次の如くである。

- ① 門人北箕「天満宮へ俳諧のほつくしふをさゝげ奉らん」と発句合を發起
 - ② 「四季の詞よせ」に「雁書」を添えて句を募集
 - ③ 寄句二万（正確には二万三百廿八句）を「廿冊にわかち一箱として」神前に奉納
 - ④ 「一卷にて五十番の秀逸」を布門に託して選
 - ⑤ 秀逸「千句を一帙として」「二万梅秀吟集」と号け梓行
 - ⑥ 上位「二百番を抜出て」奉額
- なお、序文文末によれば先集『松葉畚』の場合も同一の興行形態を

とったものらしい。

このうち①については、表Ⅱ・Ⅲに挙げた秀吟集は何れも諸社寺への奉納を名目にしており、特に問題はない。また、②句を募る際に四季自由題としたことは何よりも入選句に徴して明らかであるが、

四季発句一万四千余吟集

四季発句三千集

四季発句

四季の発句集を神前にささげ奉らん

就中有四時靈卍

奉納四季発句集

いざや式千の四季句集し

春秋の佳作を見ん

こひあつめけるほ句はむめをかざすよりほととぎすを聞もみちを

折雪を見るにいたり

奉納四季発句四千集

というように、各秀吟集の見返し・序文などに四季発句集たることが明記されていることもその傍証とならう。『松葉畚』『式万梅』で「四季の詞よせ」を添えて句を募ったのは、特に季題を指定したのではなく、作句の便を計る意図であったと思われる。なお、改めて句を募るのではなく「北・枝吉・田兄（略）洛・陽浪・華際毎見好句、一手書及三三千余」というように、やや特殊な成り立ちをしたものの中には見受けられる。さて次に、②から⑥に至る期間、つまり句を募ってから句寄が完了するまでにどのくらいの期間を要したのであろうか。

今年又難波の方梨北箕を始め五流斎の門人こゝろを合せて磨かれければ一万二千余句にミちぬ

（松葉畚・文月蘭分序）

一月にとりかかったとしても約半年で一万二千余句を集めている。菅神に奉らんと此集を宿願するの日は其時、此時成て指を折ば甲子八十にもこえんか (式万梅・跋)

宿願から成立まで甲子の日が十回程あったことを言うのであろうか。さすれば、二万余を集めるのに約二年を要していることになる。

好士に告て句をまねかるゝの時は去年の水無月……此水無月に一万七千余吟の大巻と成て初の日に開巻 (六々集・序)
これは丁度一年で一万七千余を集めている。

立田の老松うしおとゝし……いざや武千の四季句集し……西松の尾の大悲閣に法葉さゝげばやなど語らふ……集る句都合せ六千余

(松の尾集・きさらぎ花的序)

おとしの十二月に発企したとしても六千余集めるのに一年数ヶ月を要している。かように句を募つてから句寄完了までに要する期間は必ずしも一定しない。それは五流斎一門に限ったことではない。

ことし安永五春二月宗匠の春選成て配達せらるゝ序、予が宿願の趣を四境に告侍るに、五月晦日を期として相集る発句万六千六百八十餘 (時代まきゑ・序)

安永六年酉十一月発願し、同七年戌三月晦日を限てこれを促すに、限を待ずして総計二万六千六百余吟を集む (俳諧幽閑集・副言)
発句三千集の志願ありて諸君子に乞ふに日あらずして七千余吟に満ぬ (俳諧雪月花・副言)

このように、『松の尾集』の如く一年以上かけてようやく六千余を集めた例もあれば、『俳諧幽閑集』のように纔か三四ヶ月で二万六千以上集まった場合もあり、興行の規模が大きいからといって時間がかったということは必ずしも言えないようである。五流斎一門の場合も馬城選の二編と同じように一応の期限は切られたと思われるが、予

想した程句が集まらなければ再度促しなどして適宜延長したのではなからうか。凡そかような不定期の発句合に於ては、月並発句合のように一定の期限までに必ず入選句を披露しなければならぬという強い制約はない。そこに選者・投句者どちらにも気分的に緩やかなものがあり、句寄が完了し出来合次第というのが実情であったと思われる。

さて、以上のような手順で集められた寄句は『式万梅』序によれば③二万余句を「廿冊にわかち一箱として」神前に奉納することになる。つまり『松葉畚』『式万梅』二集の場合は寄句すべてを神前に奉納している。同じような例は『六々集』にも見られるが、『みつ巴』『貫珠編』『俳諧幽閑集』などでは選が終わったあとで秀逸のみを奉納する形態をとる。また、『松葉畚』『式万梅』は奉納した後には布門に選を乞うているが、この二編以外はその逆の手順を踏むものが多い。従つてこの点に関しては右二編がむしろ異例で、後には選が済んだあとで秀逸のみを奉納する形態が一般化して行ったものと思われる。次に句選である。③の段階で千句毎に二十巻に分けて清書された二万余の寄句の中から④一巻につき五十番の秀逸が選ばれる。五流斎一門の秀吟集は『芦辺鎌』を除いて全て選句を五十句毎に句頭に「巻頭」と記して並べるのを例としていたことは先に述べたが、それは各千句毎の巻からの抜萃であることがわかる。また、寄句数不明の『佐太のわたり』以外は寄句は千句一巻という分配がなされている。表Ⅲに挙げた秀吟集も、『時代まきゑ』に五百句を一巻として五十句の秀逸を選んだ例があるが、他は千句一巻として五十句の秀逸を選ぶという方法をとっている。従つて、全体の入選率もそのほとんどが5%を越えることはないが、表Ⅲの『俳諧雪月花』『花葉節』は複選のため入選率がやや高くなっている。複選について第二章で触れる。

ここに一つの疑問が生まれる。それは、寄句を千句毎に分配する際、

どのように分けるのかということである。その手掛かりを『式万梅』から拾ってみよう。『式万梅』の入選作者分布は句引によれば、大坂57名・摂津54名・紀伊26名・阿波19名・大和14名・淡路8名・和泉・讃岐各6名・武蔵5名・播磨4名・伊予・近江各3名・河内・山城・肥前・豊後・伊勢・上総2名となっている。第一巻に出るのは大坂・摂津・淡路・紀伊・和泉・大和・阿波の主要七ヶ国の作者、第二巻には大坂・播磨・阿波・伊予・和泉・近江・淡路・紀伊・大和・豊後・江戸と作者分布計十八ヶ国のうち十一ヶ国の作者が登場する。つまり、同一地域の作者が特定の巻に集中することはない。それは、同一作者の入選句が全巻に散らばっていることから察せられる。句引によれば入選句が特に多いのは大坂の方架(百十六句)北箕(七十九句)の二名である。方架の句は全巻に二〇九句の割で、北箕の句もやはり全巻に三〇六句の割でまんべんなく入選している。このような現象はどの秀吟集にも認められる。また、次章に取り挙げる滄浪居一門の秀吟集も、特別な場合を除いて同一地域の作者が集中しないように配分した形跡が著しい。おそらくは寄句を千句一巻として清書する段階で、同一地域の作者が特定の巻に集中しないように配慮がなされたものと思われる。

以上の手続を経て選ばれた秀吟は、次に⑤半紙本に仕立て適当な題名を付けて披露刊行される。その際、選句は各巻毎に「巻頭句」から順に並べられることは繰り返し述べたところである。因みに、五流斎一門の秀吟集には見当たらないが、『時代まきゑ』『俳諧幽閑集』『俳諧雪月花』には「惣巻頭」という記載が見える。これは選句全体の中の最秀逸を意味するものと思われる。『式万梅』序文には、このあと⑥秀吟一千句の中から更に上位二百番を奉額したという記述がある。同じように寄句全体の1%弱を奉額した例は、

四季発句一万四千余吟集……秀吟七百番……上座百四十吟絵馬

(桑老撰・見返し)

奉納画馬座百六拾五章 但三十三巻秀逸ノ第五迄 入集総千六百

五拾章 (時代まきゑ・奥)

二万六千余章……其秀者式百六十六章書板以掲之廟

(俳諧幽閑集・序)

というように、他にも散見する。『六々集』序文に「秀逸を絵馬に著し」とあるのもそれを言うのであろう。特に奉額の記載のない秀吟集はその事実がなかったものと思われる。

終に作者圏について触れておこう。五流斎一門の奉納発句合の作者圏は、陸奥・出羽・上総・武蔵・遠江・三河・尾張・美濃・越後・越中・越前・近江・伊賀・伊勢・丹後・但馬・丹波・山城・大和・摂津・大坂・河内・和泉・紀伊・出雲・石見・播磨・美作・備前・安芸・長門・淡路・讃岐・阿波・伊予・豊後・日向・肥前の計三十八ヶ国の広範囲に及ぶ。このうち特に中心となっているのは、摂津・大坂・淡路・河内・大和・阿波・讃岐・山城の九ヶ国である。

三 歴史

五流斎一門及びその影響下に成る秀吟集は少ない時でも三千多い時には六万を越える寄句を集め、その半数近くは一万以上の寄句を記録している。このように多数の句を集める奉納句合は一体どのような流れの中に生まれて来たのであろうか。表1に示した如く、管見の範囲内では秀吟集の嚆矢は寛保元年の布門選『松葉春』である。その序文に次のように言う。

凡何事も少しきは大イ成基とかや。俳諧の言種もひさしき世より翫びけらし。慶長寛永の比より昌になりき。次而六句附発句合もす。ハや百年に近し。しかハあれど千ゝ万に至る事ハ豊年の糺ま

れなりしに、近きころハ所々の万句附の教ハ晴るゝ夜の星ともいはんか。されど発句集ハ千句満るとハ聞かざりしに、時の至れるにや、さいつ年福原の梅史集られしが三千句にあまれり。今年又、難波の方梨北箕を始め五流斎の門人こゝろを合せて磨かれれば、一万二千余句にミちぬ。布門二度の撰者と成しハ墨の江のおほん神御見すてなきにやと、撰者の悦び理りとおぼゆ。

慶長寛永の頃から俳諧が盛んに行なわれるようになり、六句附発句台の歴史ももう百年に近くなるが、寄句が千とか万という数に及ぶことは極めて稀であった。ところが、最近所々の「万句附」では晴れた夜の星の数程の句を集めるようになった。それに較べ、発句合で千句に至る例は聞いたことがなかったが、去年福原の梅史が発句を募ったところ三千余に及んだ。そこで、今年五流斎の門人が発句を集めたら一万二千余に満ちた—というのがその主旨である。

この序文から二つのことが知られる。その一は、発句合で三千を集めたのは去る年の福原梅史の試みが最初だという認識が布門一派にはあったということである。「布門二度の撰者と成し」とあるから福原梅史集の撰者も布門であったと思われるが、その梅史集に続くのが、『松葉畚』の催しであると言う。先にも触れた如く、寛保元年の『松葉畚』以降安永五年に馬城選『時代まきゑ』が出版されるまでの間、宝暦五年茶雷選『俳諧志都織』を除いて、管見に入った秀吟集はすべて五流斎一門の選になるものばかりである。この事実を背景に『松葉畚』序文を見れば、寄句を数多集める奉納発句合及び秀吟集の出版が五流斎布門によって始められたと考えても多くは誤らないように思われる。秀吟集の嚆矢である『松葉畚』序文に句合の歴史を記し、第二集『式万梅』には選者布門自らが興行形態を詳述していることも、裏返せば奉納発句合及び秀吟集の出版が始まって日が浅いことを示すも

のであろう。因みに、『式万梅』跋文に「抑、師の撰にあふて発句を諸社に奉る事四度」とあるのによれば、秀吟集としては残らないが、『松葉畚』『式万梅』の間にも布門選による奉納発句合が催されたようである。この一門の句合に対する関心の深さを窺わせる。

さて、『松葉畚』序文に於て今一つ注意すべきは、奉納発句合の催しが「万句附」の影響下に始められたかの如き書き振りをしていることである。ここに言う「万句附」とは何を指しているのであろうか。それを考える際、忘れてはならないのは布門が雑俳の点者であったということであろう。

宮田正信博士著『雑俳史の研究』によれば、享保期に入ると諸社寺への奉納を名目とする雑俳の興行が全国的な流行を来たすようになる。その動きの中でとりわけ注目すべきは、この時期の大坂に諸社寺への奉納を名目として千句集・二千句集・三千句集・五千句集・一万句集などと標題する選句披露の会所本が極めて多く見られることである。今享保から宝暦末年までのそれらの会所本のうち、特に万句を標榜するものを拾い年代順に並べてみると表IVのようになる。

先ず布門に早く享保八年に『天満宮奉納一万句集』、享保十年頃に『有馬薬師堂奉納一万句集』の選が、また五流斎二世婆東に宝暦年中に『奉納風猛山前附一万句集』の選があることを確認しておきたい。次に興味あることは、寛保以降になると一万五千句集・三万句集・二万五千句集・一万三千句集・一万二千句集などと万以上を標榜するものも現われるが、『松葉畚』が出版された寛保元年以前のものはすべてが「一万句集」または「万句集」と題していることである。しかも、雑俳の会所本の場合には奉納四季発句秀吟集と違って、「一万句集」を標榜しているからといって必ずしも一万句を集めたことを意味しない。それは享保九年『奉納生嶋辨財天五千句集』（惣連八千五百吟）享保

二、滄浪居一門

安永に入つて五流斎一門の奉納句合が隆盛に向かおうとする頃、京都でそれに倣つた句合を催し秀吟集を出したのが滄浪居三宅嘯山である。滄浪居一門の秀吟集がおそらく安永より溯ることはないというの
は、寛政元年『奉納幾太佐可那』一和跋の

いむじ安永のはじめ滄浪居の門に入しとき、兵庫の水翁一万のは句寄を催したごちに万二千を得らる。それより尠くにて、五万
一万あるハ二万の句寄年々其数をしらず。
という歴史意識がそれを端的に物語つていよう。滄浪居一門の秀吟集
を表Vに列記する。

表 V

書名	年記	発企	選者	奉納先	寄句数	選句数	版元
〔幸崎奉納集〕 〔布留庵の錦〕	安永六年丙午秋九月序	淡海横江 止角ら	嘯山	辛崎両社 布留兩社	一万吟	六百三十章	京書林 船業師堀川 吉田九郎右衛門
をのちぐさ	天明八戊申仲秋奥	攝小野 青牛	平安滄浪居 嘯山 播磨山李坊 青羅	鳥羽実相寺	二万句	千五十句	京三条通御幸町西二入町 蕉門書林 菊屋太兵衛
納幾太佐可那	寛政元己酉初夏序	若狭 希竜・一和	嘯山	廿八社	六千句	三百六十九句	
はな筏	寛政三年亥年三月序	嵯峨 魯哉	嘯山	松尾大明神	一万四千余句	七百章 額上百余吟	
万句花角抵	寛政六年寅三月序	嘯山門社友	嘯山		一万三千余句	六百五十句	
〔花の春〕	寛政九年葉月序	伏見社友	嘯山・關更ら 八名	伏見 村田百兵衛 古稀記念	二千句	四百九十六句	
美津里	(寛政十二年以前)	(不明)	浪浪居 嘯山 陸斎 寸砂 簡竹舎 魯哉	鳥辺山	五千二百余吟	六百六句	京都京町通二条下ル町 書林 橋仙堂善兵衛
〔七化〕	寛政十二年申仲冬序	伏水 魯村・古洞	嘯山	伏水	七千余吟	四百十九句	
俳かれ蘆	享和壬戌(三) 卯月奥	李流	李流	稻荷明神五社 (嘯山追悼)	(不明)	千二百十七句	
諧花の杖	文化四年春序	(不明)	斗雪		一万三千余吟	六百十句	京都書肆 橋仙堂 京町一条
俳諧ふたつてん	文化五年戊辰霜月序	丹波清田 寸長	嘯山 李流	洛二天尊	一万句	四百二十四句	
〔俳諧悟りの道〕	文政元年寅八月序	五斗ら	李流ら九名	摂州勝尾寺 (牛尾追悼)	三千句	二百七十句	

一 秀吟集のあらまし

滄浪居一門の秀吟集は全て半紙本一冊。五流齋一門のそれに見られた見返しの印刷はないが、かわりに選句の頭に「奉納発句六千集拔萃洛三宅嘯山翁選 発起一和・希竜」（奉納幾太佐可那）などと記す場がある。丁付は板芯下部に漢数字を入れて示すものが殆んどである。また、五流齋一門の秀吟集は選句を半丁十句宛取めるのを例としたが、滄浪居一門のそれにはそのような定型はない。序跋を備えるものは『奉納幾太佐可那』の一点のみ。『美津星』『俳諧かれ蘆』には序跋共なく、『辛崎布留奉納集』は跋のみ、他は全て序文のみを備える。また、選者・発企等の追加吟があるのは『俳諧悟りの道』だけで、句引は何れも添えられていない。選句は「巻之一」「巻之二」などとして、最初に「巻頭」（巻首）を置き末尾に巻軸（軸）を据えるのを例としている。但し、『布留辛崎奉納集』『俳諧悟りの道』の二点は五流齋一門のものと同じく、「巻頭」から高点順に配列する方法をとる。また、『をのちぐさ』には各巻毎に「巻頭・巻軸」の記入が見られないが、青羅選の終巻に「惣巻頭」「惣巻軸」の記載があるのでやはり「巻頭・巻軸」形式で配列してあるものと思われる。なお、「惣巻頭」の記載は他にも『蘆の錦』『奉納幾太佐可那』『はな筏』『花角抵』『七化』『花の杖』にも見られ、滄浪居一門の秀吟集では最秀逸を示すのが一つの約束になっていたことが知られる。

以上要約すれば、滄浪居一門の秀吟集は半紙本一冊で板式に特に定型はなく、序または跋を添え、選句を「巻頭・巻軸」形式で各巻配列するというのが最も一般的であったようである。先の五流齋一門のものに比べ、極めて簡便であると言えよう。

二 興行形態

次に興行形態であるが、大まかには五流齋一門のそれとかわらない。

辛崎布留の両社奉納を催し、諸処の好士へも勧進して一万吟を十巻とし、洛滄浪居先生の評を乞拔萃六百章を擇しを、猶又写取て附録とともに小冊となし四方に伝へて（辛崎布留奉納集・跋）此丸屋斗をこそ其代の形見に留てましと……二万の句寄を思ひ立しより……三とせに及ころほひにやうく本あとげ……選出ぬる一千句を梓にちりばめ靈前に捧、かつは遠近の人々にこれを分つ

（蘆の錦・序）

往し年より氏神なる松尾の御社へほくを奉納せん事を諸処のすき人へ希ふに、今や幸に事なりて一万四千に満ぬ。それを十余り四つの巻にわかつて師翁の選をうけ、勝れたるを百余吟額に上参らせ、すべては七百章を集冊となして投贈したびける人々へ報ひ侍る

（はな筏・序）

また、句を募る際四季自由題としたことはやはり入選句に徹して明白であるが、

四季俳諧二万吟集

（蘆の錦）

雪月花の詠を乞ふ

（花の春）

俳諧四季発句七千余餘集

（七化）

四季発句五千二百余吟拔萃

（美津星）

という内題等もそれを裏付けする。それに、五流齋一門に見られたように、寄句全体の1%弱を奉納することがあったのは前引『はな筏』序に明らか。句を募ってから句寄完了までの期間はやはり一定せず、前引『蘆の錦』の場合約三年で二万句、『はな筏』は約一年で一万四千句、その他約半年で一万句（奉納幾太佐可那）一年で六千句（同上）約半年で二千句（花の春）と様々である。このあたりの事情は五流齋一門の場合と全く同じである。更に、寄句は『辛崎布留奉納集』『はな筏』序に述べているように千句を一巻として清書するのを原則とす

るが、馬城選『時代まきゑ』に前例があった如く、五百句及至六百句を一巻とする例も『奉納幾太佐可那』『七化』『俳諧花の杖』に見られる。入選率は複選のものを除き概ね5%前後であるが、『辛崎布留奉納集』は千句につき六十句『七化』は五百句に三十句を選ぶなど、五流斎一門の場合ほどその線を越えまいという意識はない。寄句を五百とか千に分けて清書する際、同一地域の作者が特定の巻に集中せぬよう配慮する点も五流斎一門と同じであるが、『はな筏』には一巻すべてを浪花の作者が、また『花の杖』にはやはり一巻をすべて膳所の作者が占めるという珍しい例も見られる。これはおそらく、その地域の投句が遅れたためにとられた非常処置であろう。また極めて特異な例ではあるが、嘯山追悼を名目とする李流選『俳諧かれ蘆』は洛・伏水・淀・嵯峨・浪花・吹田というように地域別に清書をして選をしている。

さて、五流斎一門及びその影響下に成る秀吟集は全て諸社寺への奉納を名目としていたが、滄浪居一門では特にそれにこだわらないものが少なくない。たとえば『花の春』は伏見村田百兵衛古稀記念を、また『俳諧かれ蘆』は嘯山追悼を名目に催されたものであるし、『をのゝちぐさ』『花角抵』『俳諧花の杖』などは特に名目を立てない。つまり、滄浪居一門の秀吟集全十三点のうち五点は奉納を名目としていないのである。これについては興味深い事実を指摘することができる。滄浪居一門の秀吟集には投句に付された前書を削らずにそのまま残しているものが多い。たとえば廿八社奉納を名目とする『奉納幾太佐可那』には選句三百六十九のうち四分の一を越える九十九句に前書があるが、そのうち明確に廿八社奉納をうたうものは次の二句に過ぎない。

二十八社は卯月一日大幣を捧て祭礼す

大幣身に添風やはつ裕

一和

二十八社ハ卯月一日祭礼なれハ
一やうに心あわせのまつりかな

麻生乗亀

同じように『蘆の錦』は前書のある二百十三句のうち鳥羽実相寺奉納とするもの二句、『はな筏』百八十二句中に松尾奉納とするもの二句でしかも同一作者の句、『辛崎布留奉納集』『美津星』『七化』『俳諧ふたつてん』などはそれぞれ十三・四十三・八十五・三十二句のうち一つもこれを認めることができない。同じことは『花の春』『俳諧かれ蘆』にも言える。前者には前書のある二十七句のうち賀の句一つのみ、後者は四十五句のうち嘯山追悼・李流滄浪居継承を言うもの五に過ぎない。この事実は決して投句者の不実を示すものではなからう。『辛崎布留奉納集』跋文に発企止角が

年比此道を好め共まのあたり題を得ざる時は懈て句を吐事多からず。多からざれば自ら佳章をも得ず。ここをもちて友どち志を同うして辛崎布留の両社奉納を催し

と述べるが如く、奉納・古稀賀・追悼は文字通り名目に過ぎず、要は俳諧を楽しめば良かったわけで、句合の実質に何ら変わりはないのである。

滄浪居一門の秀吟集の特色として強調すべきは選句の配列法である。先にも触れたように、滄浪居一門は選句を「巻頭↓巻軸」形式で並べるのを例としていた。巻頭は言うまでもなく最高点の句、巻軸は第二位を意味する。つまり、最初に第一位の句を据え終に第二位の句を置くのであるが、その間はどのような順で並べられているのであろうか。これについて手掛かりを与えてくれるのは『奉納幾太佐可那』『はな筏』の二書である。『はな筏』一之巻を左に例示する。

巻頭 松尾山林にて

小松などひかすな神の御名なるを

神亦応点頭

サガ里隣

春の野や世帯しまざる女どち

龐相な太郎などへめったによせられまじ

洛漆畝

二階では稲妻ちかうおもひけり

里隣

(四十五句 略)

踏迷ふ顔にすぐろのすゝきかな

洛和当

巻軸

ひとり身に一ツは過る火燧かな

紅鶴

中人以上無論而貧家亦有此事

『はな筏』は各巻とも巻頭及び次位の句それに巻軸句に漢文もしくは和文の短評を付す。『奉納幾太佐可那』も全く同じ形式で漢文の短評を添えている。これから判断するに、巻頭の次位に据えられた句は巻頭・巻軸に準ずる句、つまり第三位であると思われる。従って、右二書の選句配列は「第一位・三位・四位……五十位・二位」となるはずである。他の秀吟集も同じであると考えて良からう。滄浪居一門の秀吟集は、その嚆矢である『辛崎布留奉納集』と終焉に位置する『俳諧悟りの道』を除き、すべて「巻頭↓巻軸」形式をとる。『辛崎布留奉納集』はとりあえず先行の五流齋一門の秀吟集に倣ったものの、それ以降は自派の特色を出したということであろうか。なお、滄浪居一門と同じ「巻頭↓巻軸」という選句配列をするものとして次の秀吟集がある。

〔俳諧三つの花〕（安永八年冬序・六甲山下兎原の連社、百雅、花情発企・呉鈎齋百久選・寄句三千・秀吟百五十）

『ふたつみち』（寛政九年十月嘯山序・讃州引田如竹発企・闌更選・八幡宮天満宮奉納・額上五十句秀吟九十二句）

『仰涼集』（文化六年夏序・撰津道齋閑水舎梅宇発企・千樹亭梅斜、

落梅窩星池他三選・北辰廟奉納・寄句千三百余・秀吟百三十四）

『発句二万のさと』（文化十三年十月序・大坂鹿嶋可堂塩屋忠兵衛発企か・八日菴万和、八千房屋烏他八選・宇佐大神象山大神奉納・寄句二万・秀吟六百五十六）

『俳諧三つの花』の選者呉鈎齋百久は何人なるかを詳らかにし得ない。故に、滄浪居一門との影響関係も不明である。『ふたつみち』は序文を嘯山が書き、選者闌更は寛政九年『花の春』にも嘯山らと並んで選者の一人に名を連ねる。従って、その選句配列が滄浪居一門と同じであっても何ら不思議ではない。『仰涼集』の主選の一人である梅斜は後に触れるように『花の春』に「洛」の肩書で多数入選を果たしている人物であろう。星池については旧稿に述べた如く、夜半亭一門と交流のあった京都の人である。この二書が滄浪居一門の秀吟集を範としていることは先ず間違いないからう。『発句二万のさと』は大坂のものであるが、この時期になると『俳諧悟りの道』が五流齋一門方式の選句配列をするなど自派の特色に関するこだわりがなくなってきた。

ではここで、第一章に課題としておいた複選形式について述べておこう。滄浪居一門の秀吟集全十三点のうち、複選形式をとるものが五点ある。このうち『俳諧ふたつてん』は嘯山が選び残した分を李流が選じたもので、ここで問題にする複選には当たらない。先ず『花の春』を取り上げよう。

『花の春』は先にも述べたように伏見の村田百兵衛古稀を記念して伏見社友が発企し、集めた句二千を滄浪居嘯山・御射山牛行・菊溪菴都雀・冠芳齋閑空・暮天齋一鳳・幾風房宗盈・弄時菴斗雪・芭蕉堂闌更の八人が選をしたものである。選句は各選者毎に二巻に分け「巻頭↓巻軸」式で各巻三十一句を並べる。寄句が二千であったことそれに

選句が各選者毎に二巻に分けられていることから推測されるのは、寄句二千を千句づつ二巻に分けて清書し、それを八人の選者が各々目を通して選をしているのではないかということである。その推測は共通入選句の存在によって裏付けされる。『花の春』に入選する伏見作者の中で最も多く句が採られているのは幾行の三十六句である。嘯山選二の巻に入選する幾行の句「人万物長／外の形にしては恐れぬ案山子哉」は、牛行・都雀・斗雪各選のやはり二の巻に入選している。他の例も示そう。

其中をとりあげ姿や大夕立
月更て人にも露のはしりけり
唐黍の音忘るれハ萩の風
乞食は出来ざる国や稲の雪一

(嘯山・斗雪一の巻)
(嘯山・斗雪二の巻)
(都雀・蘭更一の巻)
(都雀・一鳳二の巻)

このように共通入選句が存在するのみならず、選者を異にして巻数も対応する。同じことは洛で最多入選を誇る梅斜の句についても言える。

鶴も下り馬も住野や花蒔
初東風や浜名の橋の塵を吹
薬玉に稚き員の背伸かな
闇深き中より捌く鶺鴒かな
通夜申す中に落けり梅の月

(嘯山・閑空・一鳳一の巻)
(牛行・蘭更一の巻)
(都雀・宗盈一の巻)
(都雀・一鳳一の巻)
(斗雪・蘭更一の巻)

以上の例から明らかのように、『花の春』に於ては寄句二千を千句づつ二巻に分けて清書し、それを八人の選者がそれぞれに目を通して

選をしていると考えられる。滄浪居一門の秀吟集のうち複選形式をとる他の三点『をのちぐさ』『美津星』『俳諧悟りの道』それに表Ⅲに挙げた『俳諧雪月花』『花葉節』にも同様の現象が認められ、こういってやり方が複選形式の基本であったと思われる。

なお、滄浪居一門の秀吟集の作者圏は、京・摂津・伏水・讃岐・若狭・山城・近江・丹波を中心に陸奥・出羽・江戸・越中・尾張・伊勢・河内・紀伊・丹後・淡路・阿波・伊予・土佐・播磨・美作・備後・安芸・肥後・筑と、五流斎一門には及ばないがやはり広範囲に及んでいる。滄浪居一門の月並発句合の作者圏が多く山城を出ないことと好対照である。

三、夜半亭一門

一 蕪村

夜半亭一門の秀吟集として管見に入ったのは『俳諧関のとびら』の一点のみである。原装茶色表紙の半紙本一冊、左肩に無辺白地題簽「俳諧関の登飛羅」と墨摺り。全十六丁の小冊子で、丁付は板芯下部に「一〇十六」とする。第一丁表初行に「俳諧関の扉」と記して、以下八丁裏まで天・地・人の三巻に分けて各五十章を並べたあと「右吉田南畝撰」とする。続いて八丁裏から十六丁表まで雪・月・花の三巻に分けて各五十章を並べ「右夜半翁蕪村撰」と記す。十六丁裏には「安永辛丑正月穀旦／集者吹田一実／清書芦帆／世話方惣社中」とある。蕪村と共に選をしている吉田南畝は天明六年『俳諧雪月花』に「中之城南畝」として、また寛政十二年『花葉節』に「四月坊南畝」として選者に名を連ねる撰津中之城の南畝と一人物であると思われる。『俳諧関のとびら』は入選句に巻頭・巻軸等の記載がないが、南畝が選者に加わった『俳諧雪月花』『花葉節』の二書は何れも選句を巻頭から

高点順に並べる形式を採るので、おそらくそれと同じであろう。因みに、夜半亭一門の月並発句合の選句披露摺り物も巻頭から高点順に並べるのを例としている。『俳諧関のとびら』には寄句数の記載もない。しかし、『俳諧雪月花』では南畝は寄句七千五百を七巻に分け第一〜六巻は各五十句を、第七巻は七十五句を選んでゐる。また、『花葉節』では六千余句を六巻に分け各巻五十句を選する。故に、『俳諧関のとびら』もそれと同じく各巻千句からの選で寄句は三千余と推測される。それに共通入選句がやはり存在し、天之巻は雪の巻に地之巻は月之巻に人之巻は花之巻にそれぞれ対応する。従って、『俳諧関のとびら』としてまとめられた発句合は寄句三千余を集め、千句毎に南畝・蕪村の二人が各五十章を選んだものと考えられる。なお、この句合の集者は吹田一実、清書芦帆も吹田の人である。入選作者六十名のうちわけを見ると、撰津が吹田・福原・高槻・茨木を中心に五十一名、浪花が五名、河内・近江・伏見・所屬不明が各一名となっている。この句合は吹田連中が撰津中心に句を募った催しで、選者も南畝が主となり蕪村は副評的な立場にあったと思われる。因みに、この句合は奉納を名目としていない。

さて、夜半亭一門の秀吟集は右の『俳諧関のとびら』以外は管見に入らない。しかし、蕪村はこれよりも早くから同様の句合の選をしてきた形跡がある。『夏より』明和六年四月の条に書き留められる蕪村句「やどり樹の目を覚したる若葉哉」には、集英社古典俳文学大系『蕪村集』の注によれば、青木月斗古俳人遺墨展に出品された真蹟短冊に「まや山奉納三千余吟集追加」と前書があった由。追加は言うまでもなく、句合の選者としての追加吟の意である。「まや山奉納三千余吟集」が上述の秀吟集と同じものを指すことはほぼ間違いないであろう。もしこの句合が明和六年頃催されたとすれば、嘯山選『布留辛崎奉納

集』に先行することになる。また、安永七年と推定されている七月五日付兵庫来屯宛書簡に次のように見える。

一、此度二千集相下申候。京師洪水大變有之、大ニさハぎ……ちと延引ニ及申候。

この「二千集」について前引『蕪村集』の注には「不明。兵庫俳人の句集に点したもののか。」とあるが、これも奉納を名目としたか否かは別として、やはり同様の四季発句合集を言うものと考えられる。その他、年次不明の蕪村書簡にも次のような記事が散見する。

一、観音堂御奉納御所願ニ付、発句あまた御書付、則引墨いたし、此たび相下申候。

一、右追加之句左ニ

雲晴て頓光^{トナリ}やさし柳 蕪村
右卒案ながら書付候。

(五月廿一日付・東瓦宛)

奉納句合愚考之儀、いさゝ承知いたし候。しかし……中く七日頃ニハ出点いたしがたく候。どふぞ中旬迄御待可被下候。

(十月三日付・白桃宛)

先月の句合、いまだ御開巻なく候や。万一間巻いまだニ候ハ、第二三尺の鯉くぐりけり柳影

右ノ句を第十五番ノ座へ引下げ申たく候

失ふた杖も闇の夜時鳥

右ノ句を第二位ニ出し申したく候

(十月廿三日付・白桃宛)

白桃宛の二通は『蕪村集』の編者が指摘される如く、一連の句合に關するものであろう。これらの書簡に言う「観音堂奉納」「奉納句合」もその規模は定かに知られないものの同性質の句合であったと思われる。

る。

また、こういった書簡などと関連し注意すべきものに、本年四月から六月にかけて大阪市立博物館で催された「三都の俳諧」展出品の肥田皓三氏蔵「蕪村募句ちらし」がある。縦17横50程の横長の絵入ちらしで、中央上部にやや大きめの字で「奉納妙見宮／絵入額上」右肩に「浪華寺社旧跡地名等／惣計廿ヶ所画賛発句／四季混雑入式一句式分宛／尤廿句以下御用捨数驗／御加入奉希候」と記し、その左に、「選者」として「洛夜半翁蕪村／兵庫洗陽舎鉄拐／浪花五彩堂吾立」の三名を挙げ、続けて「廿句以上／御加入之／御方に／集冊／晋上」、その下に「彫工 片岡新蔵」、中程下部に「卯九月晦日／寄限不延」、左下隅に「画工橋保年／輯校岸松／清書南々」、「御加入之節入式御添可被下候」とある。なお、ちらし全体に「住吉社・今宮社・天王寺・田ミノ嶋」など廿ヶ所の浪華寺社旧跡を画入で掲げてある。さて、これは卯年の催しである。選者の一人である吾立が五彩堂を名乗るのは安永九年に二世馬城が没した後のこと。しかもこの催しは蕪村在世中でなければならぬ。従って、この卯年は蕪村最晩年の天明三癸卯年と断定できよう。この句合には「浪華寺社旧跡地名等」「画賛」という制約はあるものの、それを除けば奉納を名目とする四季自由題の句合である。しかも、選者の一人である五彩堂吾立には既に先師馬城に『時代まき糸』『俳諧幽閑集』の選があり、前者に於ては「輯者」を勤める。鉄拐も嘯山選『辛崎布留奉納集』百久選『俳諧三つの花』に作者として加わった前歴を持つ。のみならず、輯校岸松は天明四年、『亀の鑑』寛政元年『はな筏』に大坂の肩書で、享和二年『かれ蘆』文化五年『俳諧ふたつてん』に福原として句を寄せ、清書南々もまた『亀の鑑』に大坂作者として名が見える。蕪村が没したのは天明三年師走であるから「九月晦日」を締切としたこの句合の選が果たして完

了したかどうか心許ないが、「廿句以上御加入之御方に」「晋上」予定の「集冊」が今まで見て来た秀吟集と同様のものではあったことは疑いを容れない。その意味でこのちらしは、当時盛んに催された奉納四季発句合興行の実態を伝えるものとして極めて貴重な資料と言えよう。

二 几董・紫暁

蕪村没後夜半亭の号を継承する几董の秀吟集もやはり伝わらないが、その句稿などに句合の選をした形跡を窺うことができる。

先ず、天明辛丑（元年）仲秋書の「倍点の弁」に

こゝに撰西の俳社中四時一千五百の発句をあつめて愚判を加へしむ

とあるのが注目される。続いて『晋明集四稿』天明八年十二月廿七日の条に「愚判二千句合披講」（於浪花）の記録が見える。更に『寛政己酉句録』の五月末から閏六月にかけて、今少し詳しい記事が残る。

必要箇所のみ左に抄出しよう。

（五月）廿一日 灘より五千句巻上る 春坡評斗也 千溪より書状仙輿より書状至来同時

（六月）二十三日 晴 浪花に赴く

二十四日 晴 暑気 五千墨点

二十五日 晴 暑気 五千墨点

二十七日 土用寅刻大暑 五千墨点

（閏六月）八日 五千句撰落成

十一日 下灘

十六日 仙輿点内開巻 徳清寺茶所にて昼よりはじまる

十七日 開巻 春坡評 自評 於徳清寺 土川兄弟入来 兵庫

敏馬出会

廿二日 桃舎より五千句朱墨落手 浪花書記とも受取

五千句秀逸

父君か色に出たる新酒かな
花鳥に疎き日雨の蛙かな
哥ひ出て反吐つく空や子規
春雨に続く雨より杜若
海苔くれし法師に春の余波哉

第二

かけるふの井筒によりし女哉
山陰の聖死なれて花の庵
君か代や蒲団の中の丸裸

二川 土川 泉奴

思うにこれは同一の五千句合に関する一連の記録であろう。几董は先ず五月廿一日に京都に於て灘からの五千句巻を受け取っている。「春坡評斗也」はその意を解しかねるが、春坡が評をする分しか届かなかったことを言うのであろうか。何れにせよ、後の閏六月十七日の記事と考へ併せれば、この五千句合に几董・春坡の二人が選者として加わることになっていたのは確かであろう。灘脇の浜の千溪及び浪花仙興からの書状は当然この句合に関するものであったと思われる。六月二十三日浪花に赴いた几董は、二十四日から閏六月八日にかけて五千句合の選をしている。そして、八日に選を完了したあと十一日には灘へ下り、十七日脇の浜徳清寺に於て開巻をすることになるが、その前日同じ所で「仙興点内開巻」をしている。言うところは仙興が点をした秀逸内の句を開巻したとしか思われぬ。几董がこの句合の選を浪花でしていることそれに廿二日に「浪花書記」の文言が見えるところからすれば、あるいはこの句合は几董・春坡・仙興の三選であったかも知れない。なお、十七日の開巻には大石の土川兄弟及び兵庫の敏馬翁が出席している。続いて廿二日には几董はやはり脇の浜の作者で

銀台脇濱
月丘、
土川大石
巴耕兵庫
石水御影

ある桃舎から「五千句朱墨」を受け取っている。これはおそらく、几董が選をした句に作者名を書き入れたものであろう。その後に「五千句秀逸」として五句、「第二」として三句を書き留める。因みに、計八句の季は四季にわたっている。初めの五句は五千句巻の各千句から几董が選んだ巻頭句と考えられる。第二として挙げる三句は春坡選の巻頭句ではないかと思われる。以上、多くは推測の域を出ないのであるが、『寛政己酉句録』の五千句巻に関する一連の記録は上述の四季発句合の流れを踏まえた上ではじめて理解し得るのではないだろうか。几董没後春夜桜の号を継承する紫暁にも同様の句合の選がある。これについては旧稿に触れたが、寛政三年『この時雨』及び寛政四年『まだら日記』にそれぞれ「聴亀奪選四季句合拔萃三十五吟」「聴亀奪選四季句合拔萃十七章」として紹介するものがそれである。筆者はこれを旧稿に於て「四季自由題による一時的な句合」と判じたものの「詳細は定かでない」としたが、これもやはり上述の四季発句合の流れの中に置いて理解すべきものであると思われる。

以上のように、夜半亭一門の秀吟集は一点しか伝わらないが、不定期の四季発句合をしていた形跡は多く残っている。但し、作者圏は五流斎及び滄浪居一門の如く広くはなく、概ね撰津（特に撰西）・浪花・京あたりを中心とした小規模のもので、寄句も五千を越える例は見当たらない。

五流斎布門によって始められた奉納を名目とする不定期の四季発句合はやがて京・大坂へ広まり、安永から寛政にかけて流行したあと文化に入ると下火になり、管見では文政元年『俳諧悟りの道』をもって終焉を告げている。寄句を五千一万と多く集める大規模な四季発句合が急速に衰えて行く事情は、化政期に盛行する月並発句合の動きと無

関係ではあるまい。享和年間には京に当季自由題による月並発句合が
登場する。また、同じ頃月並奉額句合も見え始める。それに、化政期
には京・大坂で類題発句集も数多く刊行されるようになる。大規模な
奉納四季発句合はおそらくそういったものの中に分散吸収されて行っ
たと考えられるが、それについてはまた稿を改めたい。

(五十七年八月記)

A collection of excellent hokku of the four seasons, dedicated to Buddhist
temples and Shinto shrines, in the kamigata district, during the revival period.

Kazuaki NAGAI

Summary

This paper deals with very popular contests of hokku of the four seasons, dedicated
to temples and shrines, in the kamigata district, during the revival period. And it
contains a collection of the excellent hokku, selected, announced, and published.